動向

近刊の丸山眞男著作三冊

山辺春彦

一

本稿では、昨年から今年にかけて新たに編集・刊行された丸山眞男の三冊の著作、『丸山眞男講義録』別冊一（平石直昭・山辺春彦編、東京大学出版会、二〇一七年）、同別冊二（宮村治雄・山辺春彦編、東京大学出版会、二〇一七年）、『丸山眞男集 別集 第四巻 正統と異端一』（中田喜万・黒沢文貴編、岩波書店、二〇一八年）を紹介するとともに、この三冊の刊行によって明らかになったことや相互の関係の一端について述べたい。[1] 本論に入る前に、刊行にいたる経緯に触れておく。

丸山眞男の著作は、その最晩年から刊行が開始された植手通有・松沢弘陽編『丸山眞男集』全十六巻・別巻（岩波書店、一九九五―九七年）に既刊のものが集成され、[2] その後、飯田泰三・平石直昭・宮村治雄・渡辺浩編『丸山眞男講義録』全七冊（東京大学出版会、一九九八―二〇〇〇年）など、膨大な未刊行著作が出版された。[3] このような資料状況の変化が丸山研究の活性化を促したことは間違いない。

こうした動向と重なりながら、新たな研究の基盤となる可能性を秘めた資料の公開が本格化する。東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターの丸山眞男文庫に収蔵されている丸山旧蔵資料がそれであり、東京女子大学と丸山文庫協力の会（丸山に直接間接に学んだ研究者たちからなる）の長年にわたる尽力により、二〇〇五年以降、

図書、雑誌、草稿類資料、楽譜類の整理と公開が進められた。[4] その後、丸山文庫所蔵資料へのアクセス向上を一つの目的に掲げた同センターの研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養――丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用」が文部科学省平成二四年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、二〇一二年度より二〇一六年度にかけて実施された。[5]

この研究プロジェクトの成果のうち、丸山文庫所蔵資料の公開に関連するものとして重要なのは、まず、丸山文庫のバーチャル書庫（http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/shoko）と草稿類デジタルアーカイブ（http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives）の構築である。前者は、丸山の蔵書が丸山家に所蔵されていた最後の時期の配列状況をウェブ上に再現したものであり、後者は草稿類資料のメタデータと画像（主に丸山の著作物）をウェブ上で閲覧できるシステムである。特に草稿類デジタルアーカイブは、丸山文庫所蔵資料閲覧の利便性を高めることで、同資料を利用した丸山研究が行われる環境の整備に大きく貢献したということができる。

ただし現在のところ、丸山文庫所蔵資料がもっとも活用されているのは、丸山研究においてよりも丸山著作の校訂や編集においてである。前記『丸山眞男集』の第四刷刊行（二〇一四―一五年）に際して行われた本文校訂、同集別巻の新訂増補版（二〇一五年）、松本礼二編注『政治の世界 他十篇』（岩波文庫、二〇一四年）、古矢旬編『超国家主義の論理と心理 他八篇』（岩波文庫、二〇一五年）、松沢弘陽・植手通有・平石直昭編『定本丸山眞男回顧談』上・下（岩波現代文庫、二〇一六年）の編集や注釈には、丸山文庫所蔵の丸山旧蔵書や関連資料の博捜によって得られた新たな知見が活かされている。

これに対し、丸山研究における丸山文庫所蔵資料の利用は、一部の研究者によって積極的に行われているものの、全体としては未だしという状況である。その一つの理由は、各資料のメタデータの確定や既刊著作との関連づけなどにおける困難さがあると思われるが、これは思想史研究における一次資料の利用方法とその意義というより大きな問題につながるものであり、ここでは立ち入らない。別の理由としては、より単純に、利用が容易な公刊資料に研究対象が偏ってしまう傾向が作用していると思われる。

こうした事情をふまえ、丸山文庫所蔵資料の利用を促進し丸山研究の発展に資することを目的として、東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターは二〇〇九年度より、丸山文庫所蔵資料に含まれる未刊行の丸山著作

や関連資料を翻刻し、同センター『報告』誌上に掲載している。この事業は、前記「20世紀日本における知識人と教養」研究プロジェクトの柱の一つとして引きつがれ、『報告』誌上での翻刻に加えて、プロジェクト実施期間中に『丸山眞男集 別集』第一―三巻（平石直昭・黒沢文貴編、岩波書店、二〇一四―一五年）が刊行された。これは、内容的にまとまりのある未刊行丸山著作と、『丸山眞男集』『丸山眞男座談』から漏れた丸山著作を翻刻し、年代順に収録したものである。

本稿が取り上げる三冊もまた、このプロジェクトによって行われた丸山眞男文庫所蔵資料調査・翻刻事業の成果の一部である。編集にあたっては、『丸山眞男講義録』別冊一・別冊二では丸山が一九五〇年代後半に東京大学法学部で行った東洋政治思想史講義の正確な復元を、『丸山眞男集 別集 第四巻 正統と異端一』では『正統と異端』丸山自筆原稿の翻刻と「正統と異端」研究会記録（音声）の忠実な再現を目ざした。その際に大きな手がかりとなったのは、丸山文庫に収蔵されている丸山の自筆原稿と丸山旧蔵書であった。[6] つまりこの三冊は、これまで積み重ねられてきた丸山文庫所蔵資料の整理作業の上に成り立っており、同資料の利用例の一つと見ることもできる。

二

『丸山眞男講義録』別冊一は、丸山眞男が一九五六年度に行った東洋政治思想史講義の全体を復元したものである。加えて、五六年度講義と重複する部分が多い五九年度講義から、新たな展開が見られる箇所を抄録している。五六年度講義は全六章から成るが、後半の三章はほぼ四八年度講義原稿（『丸山眞男講義録』第一冊で翻刻）をもとに語られており、この年度における新たな展開として注目すべきは前半の三章である。第一章では「神国思想の端初的形態」、第二章では「鎮護国家と末法思想」、第三章では「武士階級の意思（観念）形態」が取り上げられており、丸山が講義の対象年代を古代まで遡らせた画期としての意味をもっている。

丸山が古代から講義を開始した意図は、講義で語られたことばを追うかぎり、一九五〇年代後半の講義を通じて徐々に明確化されていった。五六年度講義第一章では「思考様式」の類型化が試みられ、政治思想・文化形態・生活様式に一定の刻印を押すパターンとしてキリスト教、中国、日本の型をそれぞれ抽象した上で、日本のそれは「原始神道」あるいは「古神道的伝統」と呼ばれ

ている。そこには「究極の規範原理」「究極的絶対者」「組織や制度の原理」が存在しておらず、その代わりに「血縁的間柄」（の擬制）や「美意識」による統一がなされているとされ、それは場の倫理・状況の倫理、「和の精神」として位置づけられている。

こうした議論がなされている五六年度講義原稿の「古神道的伝統」ということばが、後に「原型的伝統」と書き直されている（別冊一、五四―五五頁編者注参照）ことからも明らかなように、第一章でなされたこの「思考様式」論は、一九六〇年代の東洋政治思想史講義（『丸山眞男講義録』第四、六、七冊）に現れる「原型」論の元になっている。ただし一九五六年度講義では、「原型」論のような思想の成層的把握は、明示的には行われていない。[7] 一九五七・五八年度講義で「精神構造」およびその社会構造との関連についての議論を展開した後、丸山は一九五九年度講義の「まえおき」において、観念の「下部構造の連続性」を明らかにすることが「日本の現代の思想を理解するため」にも必要と述べている（別冊一、二三頁）。ここには、丸山が一九五六年度以降、講義を古代から開始し、日本の「思考様式」を抽象しようと試みた意図が現れていると考えられる。それは第一に、「時代の底に潜んでいる連続性」（同前）のあり方を明らかにするという形で日本政治思想史の通史を構想することであり、第二に現代（戦後）の思想状況を理解する手がかりを求めたものであったといえよう。

三

『丸山眞男講義録』別冊二は、一九五七年度の東洋政治思想史講義の全体と、五八年度講義で重要な展開がなされた箇所を抄録したものである。両年度の講義の構成は異なるものの、おおむねキリシタンから明治初期の文明開化までが扱われている。

一九五七・五八年度講義が先行年度の講義と異なる点は、まず、「開かれた社会」〈open society〉と「閉じた社会」〈closed society〉という対概念が分析に用いられていることである。これらがベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』とポパーの『開かれた社会とその敵』に由来することは、後に執筆された論文「開国」（一九六〇年）で明らかにされるが、一九五七・五八年度講義にかぎっていえば、「閉じた社会」が一九五六・五九年度講義で抽象された「原始神道」的な思考様式のあり方と結びつけられている点が注目される。すなわち、この思考様式は「閉じた社会」という型の社会的結合（凝集性）を支

えるものとして位置づけられ、それが現代まで持ち来たらされた理由が「閉じた社会」の持続に求められているのである。

日本において「閉じた社会」が持続したことを説明する際に丸山が着目するのは、社会構造のあり方である。丸山によれば、日本では外国文化の影響が社会の上層を通じて下層に及ぶというパターンが成立していたため、社会の下層における閉鎖性とそれを支える思考様式が破壊されるにはいたらなかったという。このように丸山は、「精神構造」（ないし観念形態の構造）と社会構造とを、それぞれ層をなしているものと捉え、両者を重ね合わせることで「原始神道」的な思考様式の連続性を説明しようとしたのである。

そして、この「閉じた社会」の閉鎖性を破って「開かれた社会」へ移行させる可能性をもつ出来事として位置づけられたのが、「開国」という歴史的経験であった。なぜなら「開国」は、社会の上層によって統制された摂取のパターンをとらず、社会の下層に直接外国文化の影響が及ぶことを意味したからである。一九五七・五八年度講義で丸山が目ざしたことは、この「開国」という経験がどのような思想的展開をもたらしたか、そして「開かれた社会」へ向かう方向性に対する反動が生じてふたたび「閉じた社会」へ回帰する様相を明らかにすることであった。

このことが、一九五七年度講義における江戸時代思想史像の変化をもたらすことになる。五七年度講義で江戸時代は、室町末期から戦国時代にかけての「第一」の「開国」に対する反動から人為的に作り上げられた「閉じた社会」として捉えられている。その第二章「徳川幕藩制の機構と精神」では、「閉じた社会」の形成に成功した幕府当局者の統治技術と、それが社会全体に浸透してゆくありさまが、第二節「〈closed society〉としての徳川体制の統治技術」と第三節「社会的精神的気候としての普遍化」において、新たに作成された原稿をもとに講じられた。

こうして五七年度講義では、徳川体制の構造分析が占める比重が増大するとともに、先行年度（たとえば五六年度講義の第四章「徳川封建体制と儒教思想」）と異なり、それが儒教思想と切り離されて論じられるという変化が起きている。それは、江戸時代の儒教ないし朱子学を「体制イデオロギー」とする見方から離れ、「世の中をみる概念装置」（丸山眞男「日本における儒教の変遷」一九七四年、『丸山眞男集 別集』第三巻、一七五頁）として捉え直してゆく過程と関連していたといえる。[8]

四

『丸山眞男集 別集 第四巻 正統と異端一』は、先に触れた『丸山眞男集 別集』第一―三巻の続巻に当たるが、内容はそれまでの三巻と大きく異なっている。本書は、今後刊行される予定の第五巻『正統と異端二』とともに、丸山が編者をつとめ、筑摩書房より出版される計画だった『近代日本思想史講座』の第二巻『正統と異端』に関連する資料を収録するものである。よく知られているように、この第二巻『正統と異端』は刊行にいたらず、丸山が遺した多数の関連資料は現在、丸山文庫に収蔵されている。

本書と第五巻『正統と異端二』は、丸山が『正統と異端』の完成形態として考えたもの、あるいはその前段階の再現を目ざしたものではない。両巻の編者たちが丸山文庫に収められている『正統と異端』関連資料を調査した結果、恣意的な憶測を加えることなく丸山の意図に沿った形で編集を行うことは不可能と判断された。そこで、『正統と異端』編集のために丸山たちが行っていた営為を伝える資料を集成するものとして、本書と第五巻『正統と異端二』を編集する方針がとられたのである。収録対象とされたのは、『正統と異端』のために丸山が書きためていた原稿と関連資料、そして同書編集のために開催されていた研究会（「正統と異端」研究会）の音声記録の文字起こしである。「正統と異端」研究会は一九五七年頃から始まったとされているが[9]、その後も石田雄や藤田省三らを交えて断続的に開催された。ただし、一九七〇年代までの同研究会に関する資料で現在遺されているのは、研究報告を聞きながら丸山がとったメモなどにとどまり、研究会での議論を十分に伝えるものではない。そこで、音声記録が残されている一九八〇年代の研究会のなかから重要な回を編者が選び、文字起こしを収録した。

本書第Ⅰ章には、「正統と異端」研究の「内容目次」を示した丸山自筆メモと、それをめぐる議論がなされた一九八八年五月の研究会の音声記録を文字に起こしたものが抄録され、続く第Ⅱ章では、丸山が書きためていた原稿三点が翻刻されている。第Ⅲ章以下は、一九八〇年代に開催された「正統と異端」研究会の各回の音声記録を文字に起こしたものであり、第Ⅲ章「当初の基本的視点／思考パターンの発生条件」にはそのタイトル通り、「正統と異端」研究会での議論を回顧し、その成果を確認する内容が含まれている。第Ⅳ章から第Ⅶ章までは、前近代の日本を対象とする研究会の記録が収められてい

る。このうち、第Ⅶ章「国学における正統と異端」以外の章では、他の機会に丸山が行った報告や講演と重なるテーマがとりあげられている。[10] ここでは各章の内容には踏み込まず、これまで述べてきた『丸山眞男講義録』別冊一・別冊二との関連について触れておきたい。

前述した一九五六年度講義における「原始神道」的思考様式の捉え方を受け、一九五七年度講義の「まえがき 日本の思想史のとらえにくさ」で丸山は、「ヨーロッパにおけるキリスト教、イスラム圏における回教、中国に於ける儒教」のような「歴史の中にあって歴史を越えたもの、即ち絶対者であり、形相 eidos」を意味する「原理的実体」は日本には存在しないと述べている（別冊二、九頁）。これに対し、同時期に開始された丸山の「正統と異端」研究は、キリスト教、イスラム教、儒教に見られるような orthodoxy（O正統）に共通する特徴を定式化することを課題の一つとしていた。そして、一九五〇年代後半講義において行われた、O正統が形成されないという日本の「伝統」（いいかえればO正統を軸とする社会とは別の形で集団的凝集性が確保されていること）の対象化をふまえ、日本においてもO正統にもとづく社会的結合を目ざすという狙いが「正統と異端」研究に込められていたと考えられる。

このことを示すのが、一九八九年五月一日の「正統と異端」研究会（『丸山眞男集 別集 第四巻 正統と異端一』第Ⅲ章収録）において、章のタイトルにも採用された「当初の基本的視点」について丸山が述べている箇所である（四八―五六頁）。ここで丸山は、「何十年前」にもなる「昔、この研究会で「正統と異端」をやった」、その「結論」を「書いてあるの」を参照しているが、これは一九六〇年代に作成されたと推定される「「文明の精神」を今日的に読みかえて、それをわれわれの Orthodoxy にすること。」と題するメモを指している。[11] その題名から明らかなように、このメモで語られる「われわれの Orthodoxy」は、一九五八年度講義では「第二」の「開国」（別冊二、七五頁）と位置づけられる維新期に活躍した福澤諭吉らの「文明の精神」をふまえたものである。たとえば、「開いた、また開く精神であること」がその具体的な内容とされ、それが「受肉」されて Legitimacy（L正統）となったものが日本国憲法の「精神」であるとされている。五八年度講義で戦後が「第三」の「開国」とされていたことをふまえれば、戦後社会が「開かれた社会」であるための「われわれの Orthodoxy」を定位すること、つまり「開かれた社会」にふさわしいO正統を探求するという課題によって、当

初の「正統と異端」研究と一九五〇年代後半講義とは関連づけられていたのである。

これまで述べてきたところからも明らかなように、丸山眞男による思想史研究の捉え方は、研究者自身の価値判断を排除するものではない。このことは丸山自身が折に触れて強調した点であった。思想史研究を含め、歴史的過去に直接現代の観念を投影することは批判されるものの、他方で研究者の現代的な問題意識に積極的に裏打ちされてはじめて、「骨董趣味」に陥らない過去の再現が可能になるというのである。[12]

こうした丸山の考え方に対し、現在においては、研究内容にバイアスをかける結果をもたらすとして忌避する向きもある。そのため、日本政治思想史に関する丸山の業績をめぐる関心のあり方は、丸山に共鳴する者の熱心な研究対象となる一方で、そうでない日本（政治）思想史研究者には顧みられることが比較的少ないという二極分化の様相を呈しているようにも思われる。しかし、研究の成果はその研究に込められた意図から相対的に独立したものとして取り扱うことができ、また、価値判断や現代的関心によって負荷がかけられた視点を通じてはじめて見えてくるものもあるのではないだろうか。日本政治思想史の研究に向けられた丸山の問題意識やその成果を明らかにする上で重要な位置を占める三冊の著作の刊行（さらにもう一冊加わる予定であるが）を機に、丸山の研究を日本思想史学・日本政治思想史学上の先行研究の一つとして位置づけ、そこでなされている具体的な思想や概念の分析、提示されている論点などについて、現在の研究水準から個別にその妥当性を吟味する作業が活発に行われることを期待したい。[13]

注

（1）本稿は、『丸山眞男講義録』別冊一・別冊二と『丸山眞男集 別集 第四巻 正統と異端 一』の編者「解説」、および以下の文献・報告に大きく依拠しており、内容に重複があることをあらかじめお断りしておきたい。平石直昭・宮村治雄・山辺春彦「一九五〇年代の丸山眞男」（『週刊読書人』第三二一〇号、二〇一七年）、東京大学校友会・卒業生室『学び続ける』シリーズ第八回「丸山眞男の講義」（二〇一八年六月九日）での『丸山眞男講義録』別冊一・別冊二の編者による報告、東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター第七回公開研究会（二〇一八年七月七日）での『丸山眞男講義録』別冊一・別冊二の編者による報告。

（2）その後、『丸山眞男座談』全九巻（岩波書店、一九九八年）が刊行されたが、丸山が参加した座談のすべてを収録したものではない。

（3）ほかに、『自己内対話』（みすず書房、一九九八年）、『丸山眞男書簡集』全五巻（みすず書房、二〇〇三―〇四年）、『丸山眞男回顧談』上・下（岩波書店、二〇〇六年）、『丸山眞男話文集』全四巻（みすず書房、二〇〇八―〇九年）、『丸山眞男話文集 続』全四巻（みすず書房、二〇一四―一五年）など。

（4）詳しくは、平石直昭「草稿資料の整理・保存・供用をめぐる諸問題――東京女子大学丸山文庫の経験から」（『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第八号、二〇一三年）を参照。

（5）この研究プロジェクト全体の成果は、『20世紀日本における知識人と教養――丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用』（東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター、二〇一七年）にまとめられている。なお、丸山研究の動向と関連づけてこれまでの丸山文庫の活動を紹介した業績として、川口雄一「丸山眞男文庫の意義と展望――丸山研究史のなかの位置」（『平成二九年度 札幌大学創立五〇周年記念公開講座講演集（第三八回）個人文庫をもつ大学――その意義と可能性』札幌大学インターコミュニケーションセンター、二〇一八年）がある。

（6）この三冊では、本文に対応する丸山自筆原稿の資料番号と引用文の出典を編者の注記の形で記し、読者の便宜をはかっている。また、『丸山眞男集 別集 第四巻 正統と異端一』に関しては、「正統と異端」研究会での報告に際して丸山が参照したと思われる自筆原稿を、「「正統と異端」研究会報告原稿」（『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第十一号、二〇一六年）で翻刻した。

（7）もっとも、五六年度講義の当時、すでに丸山は精神構造や行動様式において執拗に持続する「層」があるという捉え方をしており、その分析の重要性について同時代の論者と意見を同じくしていた。平石直昭「一九五〇年代後半の丸山眞男講義録について」（『UP』第四七巻第三号、二〇一八年三月）および別冊一の編者「解説」を参照。

（8）これをうけて翌一九五八年度講義の「まえおき 思想史についての考え方」では、「全体的な精神構造の変動を叙述する歴史」を目ざす旨が述べられている（別冊二、一九頁）。ここで「精神構造」は「社会構造における dynamism を精神という次元で裁断したもの」（同前、二〇頁）とされており、前述した「精神構造」と社会構造を関連づける捉え方が明示されている。

（9）開始当初の同研究会に参加されていた松沢弘陽氏による。『丸山眞男講義録』別冊二に収録された一九五七年度講義で第三章として「正統と異端（Orthodoxy and Heterodoxy）」が設けられたことは、『正統と異端』編集作業との関連が推測される。

（10）しかし、本書の編者である中田喜万氏が「解説」で述べるように、丸山の報告の後に長時間にわたって行われた石田雄との議論を通じて豊かな含意が引き出されており、同テーマの既刊論文・文字起こしにはない重要性をもっている。

（11）丸山文庫所蔵草稿類資料 677-2。前掲「「正統と異端」研究会報告原稿」で翻刻されている。

（12）たとえば、マイネッケの『歴史的感覚と歴史的意味』などに触れながら、「現在的関心を通じてはじめて歴史的意味を把握しうる」と説く一九四八年度講義「開講の辞」（『丸山眞男講義録』第一冊、三―一七頁）や、ウェーバーの『職業としての学問』における「価値判断排除」の主張に関し、それが「政治的無関心もしくは人生観上の相対主義の隠れみのとなることをなにより〔ウェーバーは〕にくんだ」と述べる一九四六年度講義「序論」（同前、二七四―二七五頁）を参照。なお、一九五〇年代後半の講義で「開国」という契機を重視し、「日本思想史の方法論についてのこれまでの考え方を大きく変え」たことについて、後に丸山は、「戦争中の思想的な鎖国が解かれた直後の状況と、たまたま戦争中に読んでいた維新の精神状況とがダブって私の目に映った、という学問以前の、あるいは学問を超えた生活経験が背景にあった」と述べている（「原型・古層・執拗低音」一九八四年、『丸山眞男集』第十二巻、一二〇―一二一頁）。

（13）注（1）で触れた東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター第七回公開研究会で前田勉氏が行った報告「丸山眞男の江戸思想史像」は、「職分」思想、町人道徳、公議輿論などに関する丸山の捉え方を批判的に検討したものであり、丸山の研究に対して本文で述べたようなアプローチをとられたものと考える。

（成蹊大学非常勤講師）